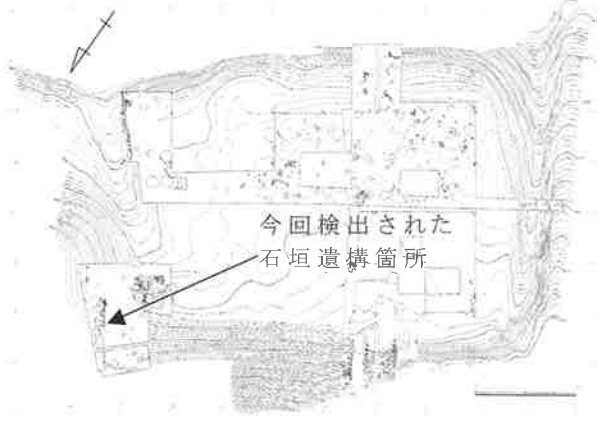


大山寺僧坊跡発掘調査成果Ⅳ

石垣について

前回は、寂静山J-14の平坦面の造成工事についてお話をし、埋没石垣の問題について触れました。今回は、その北東側で検出された「石垣遺構」についてお話をします。

「石垣」といえば、米子城や鳥取城などの石垣を思い浮かべる人が多いと思います。近世の城郭では、石垣は建築物を載せる土台として、天守などとともに象徴的な存在です。しかし、城郭に石垣が取り入れられるのは、一般的には織田信長の安土城築城以降（安



土桃山時代)からです。それまでは「城」という漢字が表すとおり、土造りによる城が一般的でした。今回検出された石垣は、それよりも200年ほど遡るものです。

J-14地点の造成地業について

発掘調査前は、方形に区画された僧坊跡の北側と東側は、草木が茂るなどらかな斜面となっていました。この平坦面の規模を確認するため、北東隅の発掘調査を実施しました。その結果、直角に折れ曲がったのびる石垣を検出しました(写真1)。

石垣の北辺では、その内側へ1mほど入った箇所に、径20〜30cmの石を積んだ石垣が存在し、それを覆い隠すように石を乱雑に置いただけの石組みがありました。これは、古い段階の石垣を、ある時期に拡張工事した痕跡と考えられます。また、東辺の石垣は古い段階のもので、五段にわたってほぼ垂直に積まれており、高さは最大で約1.2mありました。石垣に用いた石は全て自然石で、大きさは20〜80cmまで様々でした。石と石の間は、隙間が残ったままの造りで、このような積み方から、かなり古い時期のものであることが分

かります。出土した遺物から考えると、14世紀中頃〜後半頃に築かれたものと推察されます。

なぜ、新しい段階には石垣を組まずに、石を置くだけにしたのか?という疑問が湧きます。これは、石垣を築いた当時の石工職人たちの最先端技術が、その後に継承されなかったことが要因と考えています。



山岳寺院の石垣から城郭へ

今回検出した石垣は、J-14の僧坊を厚く盛土して造成する際に、盛土縁の法面保護と強化を目的として組まれたものと考えられます。

これが石垣本来の姿であり、一般的

には、この技術が戦国時代以降の山城に徐々に取り入れられ、安土桃山時代に至って、大規模な「見せるための石垣」へ発展したと考えられています。その後、幕府や大名などから庇護を受けた寺院では、逆に、近世城郭の石垣技術が導入されて、戦国時代の混乱で荒廃した石垣などが再整備され、本堂や中心的施設などに、城郭のような立派な石垣が組まれていったようです。

大山寺では、これに相当するのが、大神山神社奥宮や西薬院跡の見事な石垣と考えられます。また、大山寺全域に残る石垣から、有力者たちの経済的支援や豊かな経済基盤があったことが窺えます。

今回、検出した石垣遺構は、この地域の石垣技術の最古段階のものであり、近世城郭の石垣技術への原点ともなるもので、とても歴史的価値の高いものです。(社会教育課文化財調査班)

